
true answer

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

true answer

【Nコード】

N3931Z

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

三大帝国ができて数百年余り。平和は長続きしなかった。

三大帝国の中央に位置するここクレス帝国。

中心都市ミュステリオンのギルドにヴァイス「アインハルトとフィオナ」アインハルト兄妹は所属している。

ひよんなことから出会った少女ノーラ。

何の因果か旅をすることになった三人は世界を揺るがす巨大な陰謀に巻き込まれていく……

そして旅路の果てに出会う真実に三人はどんな答えを出すのか？

エブリスタでも連載しています。全くの初心者です。あたたかい目で読んでみてください。

序章『プロローグ』

黒い星が空を流れている。やがて小さかった星はだんだんと大きくなり、宮殿の近くに降り立つ。

星からは1人の少年が現れた。そしてゆっくりと門番の兵に近づきこう言った。

「無理を承知で頼むのだが、皇帝に謁見をさせて欲しいんだ」

黒い服を身にまとい、腰には剣をさしている。髪の毛までも真っ黒。今宵は月明かりもなく暗闇が濃い。そのためか景色に溶けこんでいるように見える。

「ダメだ。ダメだ。君のような少年に会うような機会が持てるか。もう遅いのだから家に帰りなさい」

やはりダメか。それなら仕方がない。少し荒い手でいかせてもらおう。

悪くは思わないでくれよ。

「そうか……。じゃあ君達にもう用はない。少し眠っていてくれ」

薄く微笑みそう言つと身体の周辺に魔力を発生させ、黒い光が門番

を覆いつくす。

「なっ！？ 貴様何を……」

身体から力が抜け、ばたりと倒れてしまう。辺りからは兵の気配は感じない。

静寂が世界を支配しているようだ。

「さて、それでは皇帝様に会いに行くとしますか」

序章 序プロローグ

深夜だけあり見回りの兵も少なくうまく宮殿内を動きまわっていた。長い廊下をいくつも駆け抜ける。

気配を消す魔法も月明かりがないことも手伝い、効果は上がっている。

「なんだか上手くいきすぎているような……。これで罷ったら笑えないな」

独り言をぶつぶつ言っていると、視界が開けたところに出た。

その瞬間背後から気配が現れた。しかもごく丁寧にすごい殺気めに向けてくれている。

「侵入者が現れたようだがそれは貴殿のようだな。闇魔法で気配を薄くしてみたいだが？」

「っ!？」

まさか見つかった上に属性までバレるとは……

「ははっ。これは本気で笑えない……」

見たところ相手は帝国騎士あたりってところか。
少年はゆっくりと抜刀し剣先を相手に向けた。

「私は帝国騎士ギアラハッド。貴殿の名は何と言う？ 黒服の男よ」

「俺か？ 黒い服だしこの見た目だ。だから黒騎士ってのはどうだよー！」

言つと同時に斬りかかる。ギアラハッドも即座に抜刀し剣がぶつかり火花が散る。

「ハッ！」

「くっ！ 今度は火の玉か！」

ギアラハッドは剣を振るい黒騎士と名乗る青年を弾いた後、続けて魔法弾を放ってきた。

ギリギリのところかわしその背後からは炎が上がり熱を感じる。魔力を手に集めてから打つまでのラグが短い。練度は高いな。

「あなたは火属性か。しかもかなり強力な」

序章「プロローグ」

足に魔力を集めじつと相手を見据え集中する。

アクセル！

一直線に斬りかかると見せかけ即座に背後にまわりこみ追撃をかける。

しかし全ての斬撃を防がれてしまう。剣と剣とがぶつかりあい、火花が散る。だが、完全に剣の芯で合わされ弾かれる。なのに相手は一步も動いていない。

「流石は帝国随一の防御を誇るギャラハッドだな」

「貴殿こそ、なかなかの速さと斬撃だ。魔力の収束も決して悪くない。シュバルツ＝アーテルよ」

……。素性がバレている。

「なるほど。こちらのごことは調査済みか。ならこいつも、もちろん知っているんだろ？」

黒い宝石がある首飾りを外に出し見える位置に出す。月明かりを反射して輝く。

「ほう。貴殿がそれを持つてるとは」

素知らぬ態度をとるギヤラハッドだが目つき少し鋭くなる。

「あんたたち帝国が血眼で探してるかの秘宝だよ。少しばかり話を……」

「それで交渉しようという算段なのだろう？」

こちらが言おうとしたことを先回りして言う。お互いに剣を向けあったまま話は進む。

「その通り。俺の要求は帝国騎士に入れてくれること。秘宝の捜索に加えてもらうこと。この2つだ」

ギヤラハッドは少し間をおいて答えた。

「前者についてはどうすればいい？」

「単純だ。この場で私に一撃を入れてみせろ。」

帝国の壁と呼ばれるこの男に一撃を入れるのか……。難しいがこの
機会は絶対に逃せない。

序章〜プロローグ〜

魔力を秘宝に集め力を解放してゆく。そして剣にまとわせ、強力な闇魔法が覆っていく。

「我が魔法の元に力を表せ！ アロンダイト！！」

シユバルツの周りには異様なまでの魔力が集まっている。並大抵の者では近寄ることすら難しい。

「いくぞ……」

ギアラハッドまで一気に距離を詰め、剣を振り上げる。
ギアラハッドも剣をかまえ受けきろうとする。

「我が誇りにかけ防ぎきる！」

そしてアロンダイトが纏う魔力が解き放たれ、黒い光の柱が上がり辺りを飲み込んでいく。一撃の後土煙が覆う。

「はっ。はっ。やったか？」

確かな手応えが腕に残る中、煙がはれ、影が見えてくる。
そこにはギヤラハッドが方膝をつきこちらを見ていた。

「秘宝の力……。予想以上にすごい。だが完全に扱えているわけではないようだな」

着ていた鎧は剣を持っていた肩から手にかけて砕けていた。

「化けもんかよ……。いくら全開じゃないつっても鎧が砕けただけなんて」

くそ。どうする？ もう魔力が限界に近い。そう思い次の策を考えていたところ意外な返事が聞こえた。

「うむ。それだけ開放できれば十分だ。我が主には話を通しておう」

ゆっくりと立ち上がり剣を収めこちらに歩いてくる。

序章『プロローグ』

「今日は宮殿に泊まっておけ。明日の朝に我が主に会ってもらおう」

どうやらギアラハツドの条件は合格らしい。その一言を聞き、少し気が抜け疲れが一挙に体に押し寄せた。せひともお言葉に甘えたい。

「了解だ」

と、そこへ綺麗な長い髪をしたいかにも目を惹きそうな女性が姿を見せた。

「ギアラハツドじゃない。ちょっとだけお久しぶり」

片手を上げてあいさつをしてくる。どうやら同じ騎士の位らしい。

「ところでさっきから気になってるんだけど…… そちらの若い少年君は？」

ちらりと目を向けてくる。魔力が強いような印象を受ける。明らかに一般兵と比べては失礼なくらいだ。全くと言っていい程隙が無い。

「スロアか。こっちは先程騎士になったシュバルツィアーテルだ」

ギヤラハットの答えを聞くと目を見開き、こちらを見つめてくる。

「なるほどねえ……」

うんうんと1人で頷きながら実感のこもった声でこう言う。

「確かにギヤラハットが認めちゃうのもわかるなあ……。うんうん。お姉さん、君のこと気に入っちゃった」

抱きつこうとしてきたのを無言でかわす。

「なーんだよ、もう！ つれないなあ。私、ちゃって？ ツドが遠慮気味に入ってきてスロアに答えた。」

「それくらいにしといてやれ。シュバルツが困惑しているぞ」

そこにナイスなフォローが入り救われたと思った瞬間。

「ふふっ。隙あり！」

言うが早い。気づいた時には胸に抱きしめられていた。そのふくよかな胸に押しつけられ息ができない。

「あの……。ちょっと……。息が……。できません」

「いい加減にしろ」

ギヤラハッドにそう言われると、すぐにスロアは解放してくれた。やっと息が吸え体に力が入るようになってくる。

「わかった。わかった。やりすぎました」

ひらひらと手をふって、あっさりと去っていく。さっきとは別人のようだ。

「シュバルツ。とりあえず部屋はそこだ。悪いがまだ見張りはつけさせてもらっぞ」

まあ当然か。一応侵入者だったわけだし。

しかしまあこれで第一段階はクリアだ。

序章〜プロローグ〜

翌日。窓から日の光が入ってきている。空は雲一つない晴天。外では鳥たちが鳴いている。

「まぶしい……。ふあつ。もう朝か」

もそもそベッドから降り剣を腰に差し、そしていつもの黒い外套を着て手早く用意を済ます。
そこへちよつとノックがありドアが開く。

「シュバルツ様。ギャラハッド様がお呼びです。皇帝陛下のお部屋でお待ちですのでご案内いたします。用意はお済みでしょうか？」

とつとつ来たか。皇帝さんには認めてもらわないと。
騎士なつたつて探索に加われないと意味ないしな。

「ああ。案内を頼む」

宮殿の召し使いらしき女性は綺麗に腰を折りお辞儀をした。そして優雅な動作で上体を起こした。

「かしこまりました。それではこちらになります」

寝ていた部屋から階段を使い上へと向かう。

赤い絨毯に頭上には豪華なシャンデリアが輝いている。大きな窓からは陽光が入りガラスが光っている。

やがて一つの大きな扉の前で召し使いは足を止めた。

「こちらになります。お部屋の中では皇帝陛下とギヤラハッド様がいらっしやいます。それでは私はここで失礼します」

先程同様美しい礼をして召し使いは去っていった。

流石に緊張するな……。

軽く深呼吸をして扉に手をかけ、ゆっくりと開いた。腹に力をいれ一歩踏み出した。

そこには豪華な装飾がされた椅子に座る男が1人。すぐ横にはギヤラハッドが立ってこちらを見ている。

「よく来たなシュバルツ。改めて帝国騎士ギヤラハッドだ。そしてこちらが我が主アレクサンドル皇帝陛下だ」

皇帝陛下はこちらを見ている。集中しているようで視線がほとんどぶれない。

「シュバルツ＝アーテルだ。ギャラハッドには帝国騎士には入れてもらったがもう一つ頼みたいことがある。あんたたちが探している秘宝の捜索に加えて欲しい。もちろんただじゃない」

そして例の首飾りを取り出しアレス皇帝に見せる。

「なるほどな。交渉材料もありギャラハッドを納得させる強さか。よからう…… シュバルツ＝アーテル。向かい入れよう。我が帝国騎士団へ」

序章〜プロローグ〜

その後部屋から出て廊下を歩いている。

予想外にあっさりいってしまい正直拍子抜けしてしまった。少し疑念を持ちながら部屋へ戻っていたが深読みはしないことにした。

「まあいいさ。皇帝を利用するのは俺だ」

その頃皇帝の部屋でギャラハッドとアレスが先程の事について話している。

「よろしいのですか？簡単に許可してしまっ。逆に疑われてしまっているのではないかと」

「そんなに心配するな。ギャラハッド。あいつは戦力になる。我々が目指す最終目標に近づくために必要になるはずだ。

お前もそう判断したから帝国騎士に入れるのを納得したのだろう？」

長い付き合いになる二人だからこそお互いの考えがよくわかってい

る。だから意見が対立することも少ない。ゆえに国は円滑にまわっていると

言える。

「まあそうだな。いずれは神門を開く鍵になるだろうからな」

ギヤラハットの言葉を聞きアレスは満足そうに頷く。そしてこう言った。

「あの男を…… シュバルツを利用するのは私たちだ。そうだろうか
ギヤラハット」

「もちろんだ。騎士の誇りにかけてな」

第1章く少女との出会い

「兄さん　　朝ですよー。そろそろ起きてください」

階下から俺を呼ぶ声が聞こえてくる。ベッドで寝返りをうち、頭の上にある時計を見る。

「7時……。まだ寝てていいよな……。ごめん。お兄ちゃんは二度寝をします。おやすみ」

目を閉じ再び夢の世界へ旅立とうとした時、突然殺気を放つ者が現れた。

「兄さん。もちろんそのまま夢の世界へレッツゴーなんてことはいですよね？」

おお……。愛しの妹が怒っている！
か……。可愛い！！
もう少しだけ寝たふりをしていたい。

「兄さん。……。そろそろ殺しますよ？」

笑顔だ！天使の笑顔だ！

「すぐ起きます！ もう起きます！ 起きました！おはよう！フィオナ。」

あ……危ない。一生妹の顔を見れなくなるところだった。

「はい。おはようございます。朝ごはんできてますので早く降りてきて下さいね」

恐怖で目が覚め、五感が働いてくると下からいい香りがする。

着替えて降りてくるとテーブルには朝食が用意されている。湯気が出ていて温かそうだ。

「じゃあ食べるか。いただきます！」

うん。美味しい。流石は俺の妹だ。

「あ。兄さん。さつき隊長が来て後でギルドに来るよつじとの事です」「ん。わかった。フィオナも一緒に行くんだろ？」

第1章 少女との出会い

家を出て街の中心にあるギルドに向かう。ここ都市ミユステリオンは商業が盛んなため毎日活気に溢れている。四方に門があるため出入りが楽にできる。そのため商人も多く訪れる。

「相変わらずにぎやかだな。仕事ばかりじゃなくて遊びたいよ。まったく」

「兄さんはまたそんなこと言って……。知らないですよ？ 副隊長に起こられても」

う……。そこであえて副隊長をだすんだからフィオナは副隊長のこ
と尊敬してるんだな。

「あんまり物騒なこと言わないでくれよ。副隊長怒らせたら冗談抜きで死ぬかもしれないんだぞ？」

そう。何を隠そう副隊長はとっても美人で強く、さらに優しい。しかし、怒らせたら隊長なんて目じゃないくらい怖い。

そんな雑談をしているうちにギルドに到着した。

「うーす。ヴァイス＝アインハルト来ました」

「よう。ヴァイス。相変わらず可愛い妹連れてるな。俺の嫁にくれよ」

「そうだ、そうだ。と周りからは絡まれる。いつものことながら鬱陶しい。」

「ダメですよ。皆さん。私は兄さんのことが好きなんですから」

「ぶはっ。嬉しすぎるけど周りの視線が痛い！」

「……。朝っぱらからなに兄妹漫才してるんだ顔をした隊長が部屋から出てきた。」

「隊長。おはようございます。今日はお話があるとかで」

「おお。そうだったな。とりあえず部屋入れ」

なんとか周りの視線から逃げ出すことに成功し隊長の部屋に入った。

「おはよう。ヴァイス、フィオナ。今日はわざわざ来てもらって
めんね」

部屋に入ると副隊長のルリアさんが挨拶をしてくれた。怒っていな
い時のルリアさんは本当に綺麗で優しい。
怒った時は…… 言うまでもない。

「いえ。何か厄介事ですか？隊長」

隊長は腕を組み何か思案をしている様子。これはよほど面倒なこと
なのだろう。

「実はな。最近”ミスト”が濃くなっているのを知っているだろう
？」

ミストは魔物に影響し、凶暴化させる。しかし、現在この世界では
ミストを利用して魔力を生み出して様々のことに使われている。
それによってここまで発展してきている。

「はい。知っています。凶暴化した魔物を相手にしたことがあります
すし……。最近は量も増えてきているみたいですね」

第1章 少女との出会い

最近魔物を狩る仕事が増している。しかも亜種まで現れるのだからたまったものではない。

「そうだ。ミストは色んな物に利用されるが過剰に量が増えると悪影響を出す。詳しいことはまだ調査中だが、今回はお前達二人に……」

そこへ説明の途中に部屋の扉が勢いよく開いた。隊員の一人がかなり焦った様子で駆け込んできた。

「隊長！大変です！街の北門に魔物が出現。門付近で現在応戦中です！」

「なんだと！？状況はどうなってる！報告しろ！」

とうとう街の近くまで来やがったか。これはまずいな。

「隊長。俺たちに行かせてくれ。あいつらは門番兵には手が余る。いくら門番犬までいるとはいえ危険だ」

「わかった。ヴァイス、フィオナ。すぐに北門へ向かってくれ。後から伝令役の隊員も向かわせる」

「了解だ！急ぐぞ。フィオナ！」

「わかりました。行きましょう兄さん！」

返事をするにギルドから飛び出し、北門へ急ぐ。ここは都市の中央だから北門まではそう遠くはない。

「フィオナ。今回の件、どう思う？」

走りながらフィオナに聞いてみる。

フィオナは頭がいい。昔から魔力が高いせいかわんこわんこわんも上手い。そのためか魔法を使うのも得意だ。

「やっぱりミストは関わっていると思います。魔物は普通街に近寄りませんか」

第1章く少女との出会い

「ミスト…か。ミストのことってまだ完全にはわかってないからな」
ミストは確かに生活には欠かせなくなった。とはいえやはり危険な面もある。

「先ほどの隊長のお話もミストについてかもしれませぬ。兄さん。今は急ぎましょう」

そして北門が近づいてきたところで隊員に会った。

「ヴァイスさん！それにフィオナさんも……。応援ですか。助かります」

そして門につくと予想よりもはるかに状況は悪かった。
どうやら魔物はワーウルフだ。この一帯に生息している狼で毛は白い。警戒心は高いはずなのに街の近くに現れるのはやはりおかしい。

「兄さん……。この数が街に入ったらまずいです。ここで殲滅しましょー！」

「ああ。フィオナは広範囲魔法と治癒魔法で後方から頼む。俺は接近戦だ！」

抜刀し次々に切り伏せていく。ワーウルフは元々素早いがいつもとよりさらに素早い。

「くそ。早いな。それに何より数が多い！」

そこにフィオナの魔法が広がる。フィオナは火・水・風・土の四属性を扱える。かなりの強さの魔術師だ。

「氷の刃よ。打ち抜け！フロストショット！」

ワーウルフ達を氷の弾が打ち抜く。かなりの数を減らしたがまだまだ多い。

第1章 少女との出会い

「兄さん。多分これどこかにリーダーみたいなのがいるはずですよ。おそらくこの先の森の中。統制がとれた動きをしてきますからそいつを倒せば……あるいは」

流石はフィオナ。探査も平行でしているとはな……。他の隊員も食い止められてるし、行くなら今かな？

「わかった。俺が行く。大魔法を使えるか？道を切り開いてもらえば一気に森に入る」

剣を強く握り、魔力を注ぐ。刃の色が白から光をまとい輝きだす。

「わかりました。でも兄さん。無理はしないで下さい。ここを倒しきったらすぐに向かいますから」

そう言うとフィオナは魔力を集め始める。そして水と風が混ざりあい氷を作り出していく。

ワーウルフ達はこちらを警戒しながらも距離を詰めてくる。

「覆いつくして！コキュートス！」

集めた魔力を解き放ち、拡散させていく。ワーウルフ達を二十匹ほど氷漬けにした。
そしてフィオナはこういい放つ。

「砕けよ。ブレイク！」

凍っていたワーウルフは砕け散り道が一本できた。そこを全力で走り抜ける。

「兄さん！絶対に…絶対に無理はしないで。すぐに追いつきます！」

背後でフィオナが叫ぶ。全くフィオナは心配性だ。そんなことを考えながら森に入ることになった。

第1章 少女との出会い

森に入ると辺りにミストが漂っている。地中や木からもミストは噴き出している。

「こんなにミストが濃くなっているなんて…。一体何が起きてるんだ？」

神経を全身に張りめぐらせ主を探す。少しずつゆっくりと森の奥に入っていく。

「っ!？」

後ろで葉が揺れ、ぱつと振り向いた。そこには金色の髪をした女の子がいた。怯えた目でこちらを見ている。

「君。大丈夫？立てるか？」

女の子に近づきそつと手を差し出す。女の子はおずおずと手に触れてきた。

「あ、ありがとうございます」

安心したのか目には涙がうつすらと浮かんでいる。だが、足は震えていてやっと立っている状態だ。

一人で帰すのはむしろ危険……か。

「俺はギルドに所属しているヴァイス「アインハルトだ。えっと君の名前を聞いてもいいかな？」

「私は……私はノーラ「アリアといいます。えと、道に迷ってしまった……そのごめんなさい」

「いや大丈夫。今は一人だと危険だから一緒に来てもらうけど……」

「本当ですか！ すっごい助かります！ ぜひお願いします！」

目を輝かせさっきの怯えた表情とはまったく逆だ。

なんというか……切り替えが早い？

「じゃあそういうことで。俺から離れないで」

第1章く少女との出会い

「あの…ヴァイスさん。何かあったんですか？ミストはなんか異常だし、来る途中でなんかいつもと違う雰囲気 of 魔物はいたし…」

「ああ…なんかここ最近ミストが濃くて魔物達が…って！その魔物どんなだった!？」

さりと聞き流してしまうところだった！それすつごく重要な情報じゃん！

ノーラのさつき感であまり真剣に話を聞いていなかったからな…。

「えっと確か…狼で毛並みが銀っぽかったかな？そういえばあれってワーウルフに似てましたよ」

ビンゴ。それだ。

「ノーラ。その場所覚えてるか？そいつを探してるんだ」

「はい。覚えてます。そんなに離れてないんで…えっと、こつちです」

ノーラに誘導されるまま後ろをついていく。その先には大きな木が一本あった。周りの木々より一回り幹も太い。その枝に狼は座り街の方を見ていた。

「いた。なんだ…あれ。明らかに普通の魔物じゃない。ハンティングレベルもSクラスくらいか」

ハンティングレベルとはその名の通り難易度を表す。

下から見ていると狼はこちらに気づき、目があった。俊敏に動き木から降りてくる。かなりの高さなのに苦もなく着地した。

「ノーラ！　すぐに茂みに隠れるんだ。こっちに来るなよ！」

第1章く少女との出会い

対峙してみてもわかる。毛並みは白銀でとても綺麗な色をしている。このワーウルフは北門にいたやつより上位種だ。

こいつを倒せば門は比較的楽になる。

「悪いが倒させてもらっぜ」

剣を向けるが嫌な汗が止まらない。直感がヤバいと告げている。それでもワーウルフをしつかりと捉える。深く息を吸い集中する。

「ふうー。いくぜー！」

走りだし剣を振りかざす。刃に魔力を流しながら切る。

「グルル……。ガア！」

ワーウルフの爪とぶつかりこちらが弾かれてしまう。刃を強化しているはずなのに弾かれるとはかなり硬いな……。

「なんだこいつ…。とんでもなくかてえ。だつたら」

魔力をワーウルフの頭上に集め十字架の形を作り出す。俺の属性は光のため十字架はまばゆい光を放っている。

「光の刃よ。貫け！グランドクロス」

ワーウルフに十字架が突き刺さった。

「きゃっ！」

あまりの閃光にノーラは目を瞑る。風圧で木々がざわざわと揺れた。辺り一帯に煌めいた閃光が収まるとワーウルフの姿が見え始める。

「ちっ。全然効いてないか」

諦めずに何発も撃ち込むしかないか……。問題は魔力が持つかどうか。しかし、どうやってこちらの攻撃を動かずに防いだ？

「くらえ！シャイニングボール！」

魔力弾を放つとすぐに生成し直しワイウルフに雨のように降り注ぐ。

第1章　少女との出会い

こちらの魔力はほとんど尽きたぞ。さあ…どうだよ？

「マジ……　かよ」

ワーウルフの周りには魔力障壁が覆っていた。こちらの攻撃は一切通っていない。
球形の壁からは赤い瞳が覗いている。そして足を曲げこちらに跳躍してきた。

「まずい！」

魔力の消費で体が動かねえ。このままじゃ……やられる！

「アースウォール」

やられると思った瞬間目の前に土の壁が現れワーウルフの攻撃を防いだ。

「兄さん！大丈夫ですか！？」

ギリギリ助かったか。いいタイミングだぜ、フィオナ。

「フィオナ。門は制圧完了か？」

「はい。あらかたは倒しましたからね。ちなみに兄さん。帰ったら少しお話がありますからね」

笑顔なのに…なぜだろう死を感じさせるんだ。

その理由はわかってる。絶対無理したからだよね……

「えっと……本当に申し訳ないです。と言うか今は目の前のワールフどうにかしないと」

「そうですね。しかし、兄さんがこんなに手こずるなんて…どんなやつなんですか？」

フィオナに障壁のことを話す。するとフィオナも少し顔つきが変わった。

「魔力障壁……。それを破ればいいんですよね？私が大魔法を放つてみま魔法とかさらっと撃つって言うな……。本当に撃てるからすごいけど。」

「わかった。フィオナも無理はすんなよ」

「ええ。ありがとうございます」

第1章 少女との出会い

火と風の属性が混ざりあっていく。火は風を受けさらに燃え上がる。右手を前に出しワーウルフにかざす。

「焼きつくせ！フレイムバースト！」

火は渦を巻きながらワーウルフを包み込んでいく。ものすごい熱が伝わってくる。

「すごい炎だ。これなら押し通せるか？」

「いけない！兄さん、防いで！」

突然、障壁をまとったワーウルフが炎から飛び出してきた。油断していたため回避が間に合わない。

「うわっ！」

突進をくらい後ろへ飛ばされる。

ワーウルフは着地と同時にフィオナにとびかかる。

「くっ」

右手を前に出し魔力で防ぐ。爪がぶつかり衝撃が腕に伝わる。歯をくいしばり衝撃を流そうとするが受けきれない。

「ダメっ……。持たない！」

フィオナも障壁を破られ地面に体を打ち付ける。痛みに顔を歪めながらもワーウルフを視界に入れる。

「ヴァイスさん！大丈夫ですか!？」

ノーラが駆け寄って来る。緊張と恐怖で泣きそうな目をしているが勇気を振り絞って出てきたようだ。

「ノーラか。危ないから隠れてるって……」

ちくしょう。体が動かないな……。どうする？何かこの状況を打開することは……。

「ヴァイスさん。私試したいことがあるんです。少しの間動きを止

めることにはできますか?」

第1章 少女との出会い

ノーラは近づいてきて真剣な顔で言う。その様子は先程見せた表情のどちらでもない。

「わかった。でも、危険な目にあわせるんだから絶対に防御魔法からは出ないでくれ」

これに賭けるしかない。こっちも限界だし、フィオナに捕獲魔法を頼むか……。

「フィオナ！ あいつの動きを止めてくれ！」

フィオナに大声で叫ぶ。丁度、追撃をかわしこちらへ来る。額には汗が滲み、疲れが顔に出ている。

「はあ、はあ。わかりました。なら氷属性ですね」

膝をつき目を瞑る。水と風を融け合わせる。すると、あたりの温度が下がり空気中のミストが凍り初めキラキラと輝く。それを見てワーウルフは異変を感じとったのか、回り込もうとゆっくり牙を剥き出しながら歩いている。

「捕らえて。アイソレート！」

凍ったミストを操りワーウルフに襲いかかる。ワーウルフは飛び上がり避けようとするが空中で捕まり、地面にどさりと落ちる。

「ノーラ。いくぞ。ゆっくりと近づくからな」

こくりと頭を縦にふり、おそろおそろ歩み寄る。足が凍り動かないワーウルフはこちらを睨みつけている。

「兄さん。気をつけて下さい。そちらの女の子にはケガはさせられませんからね」

わかってる。いざとなれば体を張るまでだ。

第1章 少女との出会い

ノーラは両手を前に出しワーウルフに近づける。そして柔らかく笑いかける。

「おいで。大丈夫、怖くないよ」

すると、ワーウルフとノーラとの間で暖かい光が放たれた。それはまるで太陽の陽射しのような暖かさ。

「一体…… 何？魔法？うっん。違う。こんなのは見たことがない」

フィオナは不思議さと好奇心が両方ありうずうずしているようだ。ノーラとワーウルフを交互に何度も見ている。

しばらくするとワーウルフからミストがノーラに流れている。光の珠が浮き出しノーラに注ぎこまれる。

「すごい…… ワーウルフから敵意が消えていく」

光が消えると同時にノーラが地面にへたりこむ。手を胸の前で抑え、少し苦しそうだ。

「大丈夫か、ノーラ!？」

慌てて駆け寄り抱き止める。かなり汗をかいていて無理をした様子がよくわかる。

「ごめん。大丈夫だから……」

大丈夫とは言うがノーラは驚いたような悲しいような表情をしている。

「兄さん。ワーウルフが……」

ワーウルフはむくりと立ち上がり再び視線を投げかける。しかし、先ほどのような殺気や敵意は感じられない。

第1章く少女との出会い

「人間よ。ミストからの解放をしてくれたこと、感謝するぞ」

なっ……！？狼が喋った！それ以前に魔物が喋っただど？

信じられない現状に理解が追い付かない。それはフィオナも同じように目を白黒させている。

「お前が……話しているのか？」

おずおずと尋ねてみる。必死に落ち着こうとするが上手くいかない。

「その通りだ。我はこの一帯のワーウルフ達をまとめているものだ。迷惑をかけた。すまない」

そう言つと頭を垂れる。

「いや、その……聞いてもいいか？」

「うむ。答えられる範囲でなら答えよう」

そう言うと後ろ足を曲げ座る。どうやら質問に答えてくれるそうなので率直に言ってみる。

「いったいどうやって俺たちに話しかけている？魔物が話すなんて聞いたこともない」

ワウルフは目を瞑りしばし間をあけたあと、口を開いた。

「確かに人間と意志疎通を図れる魔物はそう多くはない。我は太古から生きている。よって魔力が高いのだ。だから意志を伝達できる」

なるほど。だから魔力障壁なんてできたのか。少しだが納得がいった。未だに半信半疑だがフィオナも一応の理解はしたようだ。

第1章く少女との出会い

「人間よ。ミストからの解放をしてくれたこと、感謝するぞ」

なっ……！？狼が喋った！それ以前に魔物が喋っただと？

信じられない現状に理解が追い付かない。それはフィオナも同じように目を白黒させている。

「お前が……話しているのか？」

おずおずと尋ねてみる。必死に落ち着こうとするが上手くいかない。

「その通りだ。我はこの一帯のワーウルフ達をまとめているものだ。迷惑をかけた。すまない」

そう言つと頭を垂れる。

「いや、その……聞いてもいいか？」

「うむ。答えられる範囲でなら答えよう」

そう言うと後ろ足を曲げ座る。どうやら質問に答えてくれるそうなので率直に言ってみる。

「いったいどうやって俺たちに話しかけている？魔物が話すなんて聞いたこともない」

ワウルフは目を瞑りしばし間をあけたあと、口を開いた。

「確かに人間と意志疎通を図れる魔物はそう多くはない。我は太古から生きている。よって魔力が高いのだ。だから意志を伝達できる」

なるほど。だから魔力障壁なんてできたのか。少しだが納得がいった。未だに半信半疑だがフィオナも一応の理解はしたようだ。

第1章 少女との出会い

「兄さん。街に戻りましょう。状況も確認したいですし」

「そつだな。…… よつと」

ノーラを背負いあげる。心地よい重みを背中に感じつつ歩き出す。

「そついえば兄さん。そちらの方は誰ですか？まだしっかりと紹介は受けてないですよ」

確かに……。紹介するの忘れてたな。

「こつちはノーラ。詳しいことは街にいたら話すよ」

それにしても不思議な子だよな。ミストを魔物から吸収できるなんて……。あとはこの異常なミスト、喋る魔物か。

……。くそ。わからないことだらけだな。

森から出て北門につくとそこでは副隊長が隊員達を指揮していた。よく通る声での確な指示をだし、後処理をしている。

すると、こちらと目が合うと少し小走りで駆け寄ってきた。

「ヴァイス、フィオナ！大丈夫！？ ああ…こんなに傷だらけになっちゃって」

自分の体を改めて見てみると確かに傷がかなりある。服もぼろぼろだ。フィオナも傷の多さに驚いているようだ。

「すみません。ルリアさん」

ここは素直に頭を下げ謝る。無茶しちゃったのは事実だしな。

「まあ反省してるならいいけど……。でも後で私のところに来てね。あ、もちろんフィオナもね」

……。これは暗にあとでお説教と言われてるようなもんだよ。

第1章 少女との出会い

「あら？そちらの女の子は？」

ルリアさんには森の中でのことはすっかり話しておかないと……だよな。

「実は……。信じてもらえるかわからないんですが」

喋る魔物のこと。ノーラのこと。警告のことを伝える。ルリアさんは表情を変えることなく耳を傾けている。

「それは興味深いわね。ノーラさんのことも詳しく話を聞きたいけど、とりあえずはあなたたちはいったん病院へ行きなさい」

「わかりました。じゃあまた後で伺います。フィオナ行くぞ」

「はい。あ、えと、その…… ルリア…副隊長。ま…また後で」

フィオナが顔を赤らめて視線が泳いでいる。まるで恋する女の子じゃないか。そりゃ、ルリアさんは強いし綺麗だし憧れるのはわかるけど兄としては複雑だよ……。

「お前さ、そんなにルリアさんのこと好きか？」

「大好きですよ!!」

間髪入れずに答えるフィオナ。そんな様子に苦笑いを浮かべてしま
う。俺はどこで育て方を間違えたんだろうな……。

「なあ。悪いことは言わないからルリアさんは止めよう。あの人は
怖いしさ」

「いくら兄さんでもルリアさんへの侮辱は許しませんよ……。それ
を言うという事は覚悟があるんですね？」

第1章　少女との出会い

「失言でした誠に申し訳ありませんでした」

誠心誠意謝ってみたがフィオナからは冷たい視線がとんできて、思いきやふっと視線が緩んだ。

「……………。まあいいでしょう。今回は許します。だからもう無茶はしないで」

フィオナの目にはうつすら涙が浮かんでいる。

「ごめんな。また心配かけちゃって」

頭におきくしゃくしゃと撫でる。その間フィオナは目を閉じ、気持ち良さそうに、どこか安心したような表情をしていた。

そしてぼろぼろになった体を引きずりつつ病院へ向かった。

第1章 少女との出会い

翌日。

俺とフィオナはノーラの病室に来ていた。フィオナはそれほど傷はひどくなかった。かく言う俺も魔力の消耗は大きかったが傷はそれほどでもなかった。

「ノーラさん。まだ眠ったままですね。大丈夫でしょうか……」

森で倒れてからノーラはまだ目をさまさない。医者の話では命に別状はないとの事だったのでひとまずは安心だ。

「邪魔するぞ」

がらつとドアが開き、隊長と副隊長が入ってきた。いつもの仕事での雰囲気は無い。

「隊長、副隊長。お疲れ様です」

「おう。そっちのノーラって子の様子はどうだ？」

「はい。まだ眠ってます。いまは安定していますが……」

「そうか……」

みんなでノーラのことについて話し合っているとこのでベッドから声が漏れてきた。

「ヴァ…… イス。おお…… かみ」

うわごとのようにノーラから聞こえてくる。それは苦しみから助けを求めている。そんな風に俺には聞こえた。

「ノーラ、大丈夫か！俺ならここにいますぞ」

ノーラの強く握る。自分の存在を示すように両手で掴む。心の中で必死に自分の想いよ伝われと念じる。

第1章 少女との出会い

と、ノーラの目がゆっくりと開く。

「ヴァイス？あれ？私…… どうして寝てるの……」

朝、起きたばかりのような微睡んだ表情をつかべている。むくりと上体を起こす。

「ノーラ！ 良かった……目が覚めたか。」

「ん…ん？ うん。目、覚めたよ」

さも当然だとばかりに真顔で言うノーラ。その様子を見て俺はどうか安堵する。

「全く、心配かけちゃがって」

「しゅめ」

頭をぐりぐりと撫でてやると気持ち良さそうな声を出す。そこへ隊

長がノーラに質問をする。

「ノーラさん。この街のギルドの隊長のジークだ。森での事を詳しく教えてもらえるだろうか？」

森でのことは俺もフィオナも話したがやはり詳しくはわからない。

「ノーラ。話してくれないか？」

「うん。わかった。でも私自身詳しいことはわからないの。それでもいい？」

少し不安な色が目に映るノーラ。だから俺はできる限り優しく言った。

「もちろん、大丈夫だ」

第1章 少女との出会い

すると、ふわっと笑った。

「ありがとう。私は子供のころからミストを身体に取り込むことができたの」

今に始まったわけじゃないのかと少し驚く。

「でも、やっぱりそんなことができるのって私だけだったから……。よく学校とかではいじめられたわ」

ノーラは過去のことを思い出しながら話す。

「魔物からミストを取り込んだ時はその……上手くは言えないんだけど、感情？みたいなのが流れこんでくるの」

「感情？」

ミストに気持ちが刻まれるってことか？だとしたら本当に不思議な力だな。

「うん。悲しいよとか苦しいよとか…… どんちかって言うと暗い感情が伝わってくるの」

魔物の…… 気持ち……か。考えに浸っているとノーラは顔をうつむけこぼそりと言っ。

「あのワーウルフからはそれだけじゃなかったような気がするんだけど……」

そこで隊長は腰を上げる。

「ありがとう。ノーラ君。よくわかった。悪いのだが退院したらギルドにその兄妹と一緒に来てくれるか？」

第1章 少女との出会い

「わっかりました。ジークさん」

ノーラは元気よく答え、それを聞いたジーク隊長は満足そうに病室から出ていった。

「ノーラ。先生の話だと明日には退院はできるらしいからゆっくり休んどけよ」

はいはいと言いながらベッドに寝ころがる。

「ノーラさん。私、ヴァイスの妹のフィオナと言います。改めてになりますけどよろしくお願いします」

すぐくかしこまった挨拶をするフィオナ。この二人は仲良くなれるのか？

「うん！よろしくね、フィオナ。ていうかすごく綺麗だね」！

矢継ぎ早の質問をするノーラに面食らっているフィオナ。うーん…
…珍しい光景だ。

「二人とも俺はちょっとギルドに行ってくるからな」

言うてはみたが聞いてないな。

外に出ると太陽が煌めき、陽射しは強い。風はそよそよと吹き心地よい。

「さて、仕事でも受けておくかな」

第1章 少女との出会い

病院を出てギルドへ向かう。ノーラのこともしっかり隊長と話しておかなければならない。

ギルドの扉をあけると中では隊員や受付の人が応対をしている。ここには魔物の退治の他にも、警護の仕事や街の治安についての仕事も舞い込む。

一言、二言挨拶をして隊長の部屋へと入る。

「こんにちは」

軽い感じで挨拶をすると隊長はタバコをくわえたままこちらに振り向いた。

「ん？なんだヴァイスか。もう大丈夫なのか？」

「まあ大丈夫ですね。なんでなんか仕事ないツスか？」

「仕事ではないがちょっとやって欲しいことがある」

タバコをもみ消し、目を合わせてくる。

「いいッスよ。できればリハビリになるようなのがいいんだけど」

すると、隊長はにやりと笑う。嫌な予感が頭をよぎる。

「ちょっとルリアと模擬戦でもやってみないか？リハビリにはちょうどいいと思うぞ」

嫌な予感とは当たるものでまさかの模擬戦とは。しかも、相手はよりによってルリアさん。いくら模擬戦と言っても手を抜いたら死ぬじゃないか……。

第1章 少女との出会い

「その話、もちろんヴァイスはやるわよね？」

なんとも図ったようなタイミングでルリアさんが部屋に入ってくる。その表情には逃がさないとでている。

「ぜ……ぜひやらしていただきます」

俺はそう言うしかなかった。

ギルドの裏には訓練するための広場がありそこで模擬戦をすることになった。お互いに位置につき構える。

「さて、私と戦うのはずいぶんと久しぶりだけど……ふふ、楽しみだわ」

そう言い銃を取り出す。ルリアさんの得物は魔導銃。両手に一丁ずつ持ちこちらへ向ける。

「俺も楽しみですよ。今回こそは勝たせてもらいます」

ルリアさんはこのギルドでも屈指の強さだ。ほとんどの隊員はおそらく勝ったことはないはず。そんな俺も勝ったことは今までに一度もない。

お互いに構えしやし静寂が訪れる。集中を高め戦闘体制に入る。左足を後ろに引き、右足を曲げ体重を乗せる。さらに魔力を集める。

隊長から模擬戦の合図の一声が響く。

「それでは…… 始め！」

第1章　少女との出会い

始まりの合図とともにルリアさんへ走る。遠距離武器に対応するから近距離戦に持ち込むこと。

「甘いわね、ヴァイス」

剣を振り斬るがそこにルリアさんはすでにいない。視界からいなくなったかと思うと、最初に俺がいた位置にルリアさんは悠然と立っている。

そして銃をこちらへ向け、銃口は火を吹く。

「いつのまに！　うおっ」

ギリギリで反応をし、剣で銃弾を弾く。しかし、容赦のない銃弾の雨が襲いかかる。

「反応はまあ良し。さあここからどうする？　ヴァイス」

ルリアさんに回り込むように攻撃を避けつつ、魔力を行使する。

「現れる。サンクチュアリ」

光属性の魔法が包み込む。三角錐に形どり銃弾を防ぐ。

「あら、そんな魔法も使えるようになってたの。でもそれでいいのかしら？」

そう。ルリアさんが言う通りこれでは一時しのぎにしかない。だけど、俺の狙いは別にある。

「私もそれなりの威力の魔法をさせてもらっわよ？ちゃんと……耐えてね！」

笑顔でそう言うと両銃にそれぞれ違う魔力を溜める。片方には火属性、もう片方には地属性だろうか？

「くらいなさい。フレイムバレット！」

第1章　少女との出会い

撃ち出された弾丸はやはり火属性と地属性。それらは混ざりあいながらまるで溶岩のような状態に変化をする。

「そんなことまで!?!」

サンクチュアリに直撃し激しい衝撃が体全体に走る。だが、それだけでは終わらず次々にルリアさんは弾を撃ってきた。

「大丈夫だ……　しばらくすれば弾切れになるはず。その瞬間がチャンスだ」

小声で呟きサンクチュアリの維持に努める。弾を受け止めるたびに走る衝撃に必死に耐える。

だが、弾丸の雨はやむ気配をみせない。

「なんで……　なんで攻撃がやまない」

恨みがまし声を漏らすがそこルリアさんはこちらの考えを見えすいたように言う。

「ヴァイス。弾切れを狙ってるなら無駄よ。私の銃は魔力を弾として撃っているの」

おいおい……そんなのってありかよ。んな銃は聞いたことがないぞ。

「ほら、早くしないと」

ルリアさんの顔がいじめることが心底楽しそうに笑う。

うわぁ……………これは急がないとルリアさん止まらなくなっちゃうよ……………。

第1章く少女との出会い

サンクチュアリを解きつつ魔力を展開する。そしてシャイニングポ
ールを作りだす。

牽制の意味をこめルリアさんの足元へ放つ。

「おっと。当たらないわよ。このまま負けかしら？ヴァイス」

今だ。サンクチュアリを解き、一瞬の間にルリアさんの背後へ回る。

「くらえ！」

剣を振り上げ斬りつける。早い斬撃を繰り返す。しかし、ルリアさ
んは体を柔らかく使い華麗に避ける。そのまま後方へバックステッ
プでさがる。

「早いけど…… それじゃあたらないわよ。ヴァイス、そろそろ解
放してもいいんじゃない？」

剣の解放。俺の剣はエクスカリバー。必殺の一撃は確かにある。

「わかりました。もう俺にはこの手を使うしかない」

魔力を剣に流し始める。刃の色が真っ白から少しだけ属性をおびはじめ。

ルリアさんも銃に最大量の魔力を溜める。片方の銃にのみ収束することであり威力があるはずだ。

「いくわよ。ヴァイス」

溜めはルリアさんが先。放出された弾丸は一筋の光の矢のよう。その軌跡には魔力の名残が煌めく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3931z/>

true answer

2011年12月29日16時45分発行